

春燈

12月号

December 2011



主宰の句

安立公彦

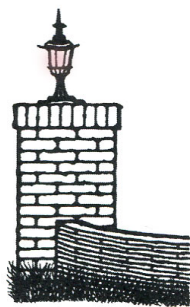
篁に昼の影置く曼珠沙華
(我孫子五句)

懐旧や秋風胸を去りやらす
(直哉旧居)

柿一つ実篤の絵に息づけり
(白樺文学館)

若きらは影もしなやか鳥渡る

蟻踏まずゆく秋光の湖畔径



安住敦の句

石上に散りし牡丹のすでに冷ゆ

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

牡丹を愛した先生なればこそ「すでに冷ゆ」と石の上に散った牡丹への哀しくも優しい思いが伝わります。先生の数多い牡丹の句の中でも特に心惹かれる作品です。牡丹の頃になると上野寛永寺の牡丹の俳句大会で安住先生の選を受けたことが思い出されます。そしてご一緒に清水観音堂や五條天神を散策し、先生の『東京歳時記』に載っている秋色桜を教えてくださいました。

大嶋 洋子

安住敦の句

引くといふこと鴨にあり人にもあり

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

朝日俳壇選者に就任された年の一句。中村草田男のあとを継いで自薦他薦の候補者がひしめいたという。敦先生は「俳人協会会長としてではなく、俳人として」後任選者に選ばれた。選者としてのご活躍ぶりには逸話が多いと聞く。先生が就任されたばかりの年のこの一句には爽やかな諦観があり、温厚で周囲から推服された敦先生の人格を偲ぶにふさわしい一句である。

栗原完爾

燈下集



○ 太田佳代子

秋蝶や会ふこともなく積む日数
なだらかな坂くだりある九月かな
曼珠沙華触れてしまはぬ距離にをり
秋晴や四つ辻どこも日を受けて
過ちを丸めて捨てて長き夜

○ 荻野嘉代子

糸瓜忌や子規のボールの飛びし山
秋場所や矢張りなつかし太鼓の音
西鶴忌「遠近集」を探しをり
十七夜早くも夕餉済ませをり
列柱にドン・ファン隠る無月かな

○ 久保久子

身に沁むや格天井のされかうべ
御自由にとの札さげられし種ふくべ
走り蕎麦つもる話はさて置いて
神集ふ稲佐の浜の星明り（出雲一句）
お忌みさんには物音たてず寝待月

秋澄むや棋神の眼さらに清む祝・葵様 天山唐壺
沈々と真水の蒼や厄日前
稜線を空にあづけて大花野
登高や生涯通す意地ひとつ
猪垣の山畑暮るる天城かな

○ 廖 運 藩

秋暑し古書積ん読の薄埃

秋暑し父祖に伝はる扁平足

秋暑し古兵音痴の「海行かば」

秋暑し昔卵は糲殻に

鶴来るこの日大安吉日ぞ （銅鑪ち丹熾を市に轟）

○ 渡 邊 泰 子

旅立ちの早さを惜しむ秋暑の忌

国愁ふ秋の風鈴鳴り止まず

雲ゆきのどこかあやしく秋暑かな

雲水の足の速さよ秋気澄む

秋水を掬へば聞こゆ父の声

○ 生 方 義 紹

盆花を小脇に抱ふローカル車

野良道を盆僧はやもバイク駆る

バルコニーは共用部分白木樅

捨てかぬるもの溜まりゆく秋桜

マンションの窓耿々と無月なる

○ 久 米 憲 子

秋扇とりつくしまのなきはなし

山門の仁王に秋思あづけけり

木の実降ることんと力もらひけり

音立てて風荒るる日のとろろ汁

胸に棲む人に白桃むきにけり

○ 小 倉 陶 女

五百羅漢なべて福耳賜日和

したたかに風やりすぎす薄かな

ほんたうの空の蒼さや曼珠沙華

実石榴や箱根細工のひみつ箱

たはむれに書く恋文や望の月

○ 荒 井 慈

ケーブルカー一番前の秋澄めり

爽やかや身を清めたる御神水

阿夫利嶺を揺るがす神鼓秋高し

鬼やんま相模の国を俯瞰せり

参道の木地師の店や秋灯

春星賞受賞作（20句）

夕河鹿

篠原

幸子

はりつめし心ゆるびぬ鹿の子百合

土手の端にはたるの恋をのぞきけり

ほうたるを籠めし母の掌白かりき

青田から青田をつなぐ遠汽笛

手にむすぶ水の明るき山清水

夕河鹿ことなき郷に安堵かな

夜の秋座敷わらしのよぎりけり

常よりはねんごろにする盆仕度

千振や苦言といふも今はなく

夕光に葉蘭のさやく秋彼岸

月の舟かたぶくほどに母を恋ふ

眼裏の峡の紅葉の絞り染

春立つや絵馬の願文あふれ出づ

まんさくのほつほつ咲いて日のゆらぎ

淡雪のあなどりがたき重さかな

独活の香に母郷みちのく地震のこと

逆境に負けじと仲ぶや蘆の角

いづくへも旅立ちかねて春の鴨

金盞花あるがまま生きこの後も

実桜に久闊叙する一ト日かな

当月集

安立 公彦選



○ 矢口 笑子

アイライン引けば猫めく月夜かな

吾亦紅人恋ふ丈を伸ばしけり

佇めば風の戸惑ふ芒かな

木洩日にほぐす秋思や旅二日

色褪せて菊人形の立疲れ

○ 藤原 若菜

秋の日や娘と並ぶ婚約者

秋茄子といへどとりどり道の駅

たふれたるままの石仏秋の声

人怖ぢの癖や紫苑に立つつべ

濡れ髪を透かす葉月の夜風かな

○ 川崎 真樹子

朝寒や舌に纏はるミルクの膜

時織り込むやうに煮詰むる柚子のジャム

冷やかに小鉢の縁に割る卵

虫鳴いて命の嵩をへらしけり

秋渴き土偶の口にマシユマロを

○ 西岡 啓子

秋澄むやひたに笛吹くをみな像

秋茄子の長きを称へ戴きぬ

秋冷の横顔うつる夜の車窓

水澄みて心ととのふ夕べかな

素十忌やいつも身近に虫眼鏡

○ 石田 康明

仰け反りし巨木のあはれ秋出水

長き夜を還らぬ友と酒酌まむ

朝寒や喉に貼付く粉ぐすり

騙し絵展港ヨコハマ暮の秋

親愛なるきみへ一筆秋惜しむ

春燈の句

安立 公彦選



風狂の旅かもしれない雁の列

千葉 神田 恵琳

敗荷の葉脈しかと素十の忌

病む肩を押さへてききぬ秋の声
更待の旅寝や母娘ふたりして

秋の川行雲ゆるぎなく映り

よぎりし名秋夕焼の中に消ゆ
冷やかや入日の残す青み空

垣間みる北信五岳とろろ汁

さきがけの紫苑一輪天を向く
鳩よせの口笛澄むや秋夕べ

入相の鐘に始まる虫しぐれ

京都 曾根 京子

十六夜を載せて重たき山の肩

こもりくの初瀬の稲田雨三日
名月を泳がせてゐる堰止め湖

秋祭神に届けと打つ太鼓

三重 上野 進

意地張つて一気に折れぬ花薄

指先に茗荷の香り散髪屋
笈摺のふたり熊野へ秋の水

震災を生き来し仲や虫すだく

宮城 谷山 友夫

乗換の駅いくつ経て島は秋

夫恋ふや雲間にじらす小望月
名月に重ね子の古希祝ひけり

秋深し乗換ホームの夜のベンチ

埼玉 茂木 なつ

天高し海辺に街も村も消え

湯上りに匂ふ黄楊櫛十三夜
踏まれてもふまれ上手よ野紺菊

暮るるには間のある日影萋の花

宮城 西川 春子

震災に負けじと実る稲田かな

余言

安立公彦

う。しかしその男（女）はそういうことにお構い無く、クラリネットを吹き続ける。一抹の哀愁を誘う句だ。

父ひとり空仰ぎゐる門火かな

小泉 貴弘

盃蘭盆会の風習は今でも広く残っている。それは農村、市井を問わない。しかし門火を焚く習いは範圍が狭まって来ているようだ。この句を見ると、遠い日のお盆の情景が甦つて来る。父母ともに健在だった。夕方明るい内に帰つて来た父が、母とともに迎え火を焚く。近所のどの家の門口からも芋殻を焚く煙が上っていた。「父ひとり空仰ぎゐる」姿も、その記憶の中に揺蕩う。その上五中七は、「門火」という真実と結び、みごとに表現を成す。

新走り銘夕月を盃に

末吉 治子

ふつくらと包む風呂敷鱗雲

小菅 礼子

「新走り」とは言い得て妙。その新酒の銘は「夕月」である。作者はいま「銘夕月」を盃に満たす。この句、散文に直すと、「夕月という新酒を盃に注ぐ」とだけだ。しかしその散文が俳句として再現されると、かくも調べの高い雅な作品となる。定型が宿す言葉の奥行きの高さと「言うべきか。改めてその調べを味わおう。」

「風呂敷」の語源は、今では考えられないが、「風呂屋で入浴客が衣類を包み、また足をふいた布の名」から転じたという。しかしこの名にはいかにもゆつたりとした寛ぎの思いがある。作者はそれを「ふつくらと包む風呂敷」と表現する。然り、いかにも日本的な詩情だ。

ひろめやの化粧崩れや秋日和

寺村 年明

竹めば風の戸惑ふ芒かな

矢口 笑子

「ひろめや」は広め屋、ちんどん屋。今は殆ど見ることもなくなつたが、昔は店舗などの宣伝で良く見た。その広目屋の先頭を行く男（女）の厚化粧が汗で崩れているとい

「芒」の句と言へば、野見山朱鳥の、へけふの日の終る影曳き糸すすぎを思い出す。遺句集『秋絶』所載。この句、「日

本大歳時記」では「けふの目を」となっている。掲出句、「風の戸惑ふ」がいい。夕暮の景か。普通なら「風になびける」とするところだが、それでは報告の域を出ない。「戸惑ふ」までにはいくつかの表現の反復があったと思う。それを乗り越えるのが推敲だ。この句の通り。

乾パンの穴にしみゆく夜寒かな

大草由美子

この作者の今月の五句何れも悽愴だ。へトランク下げひとり秋ゆく癌告知、へわれ逝かば杖いれくれよ曼珠沙華。読みすすみ掲出句に至り、読み手の思考が止まる。乾パンは食材である。しかし作者にはそのビスケット状の小さな化粧穴に「夜寒」がしみ込むと感じられたのだ。

旧作に、へしみじみと孤なるを知るやお元日、へ石女に柔やはと笑む泥糰などの句があった。この作者の感性も大事に育ってほしい。快癒を願うばかりだ。

微笑みて語らぬ写真鶏頭花

熊谷 清子

作者は気仙沼の会員。三月の大震災では想像も出来ない被害を受けた。この句の写真の人もその一人だろう。「微笑みて語らぬ写真」は悲惨だ。この被災は震災地の人だけの問題ではない。逝きし人、残る人、そして日本の全ての人の負うべき事実である。

同時発表の、へ天界は豊漁なるや鯛雲の句も、被災地の

人でなければ言えない真情の吐露だ。そういう作者にもへ散策の一人の山路秋鮎」と言うひと時の安らぎが訪れる。しかしその安らぎの間も、故人への思いは離れない。

震災を生き来し仲や虫すだく

谷山 友夫

作者も気仙沼在住。大震災の津波を真正面から受けたと聞く。気がついたら空家となって水面に漂う他家の二階に、一人伏していたとのこと。

震災から二百二十日。鳴く虫の音に、お前も震災後の惨禍を共に生きのびて来た仲間なのだ、との思いが湧く。短い寿命の虫ゆえ、その虫に語りかける思いは哀切だ。へ秋深し乗換ホームの夜のベンチの句も一連の被災の句。読んでいると切迫感が深まる。

震災に負けじと実る稲田かな

西川 春子

この作者も気仙沼の人。震災後気仙沼では、燈下集の諸岡孝子さんを指導者に、新しく定例会が発足した。作者はその句会の春燈人では一番若いと聞く。

この句も前向きな作品だ。「負けじと実る」には、被災地の全ての人の思いが祈るようにこめられている。今度の震災で一番強く感じられたことは、みちのく人の姿勢の立派さであった。そういう日常の中での、へ更待の旅寝や母娘ふたりしては、見る者に安堵の思いを与える。